

聖書:民数記27章12～23節

説教:羊飼いがいなければ

はじめに

今日午後から、2024年度信徒総会を開き新しい年度の歩みについて皆さんと一緒に話し合っています。議題として最も大きなことは、後任牧師招聘に向けて備えていくということになるでしょう。牧師交代はどこの教会にとっても大変なことです。特に私たちには初めて経験することですので大きな戸惑いがあります。そういうときだからこそ、聖書ではどのようにしてリーダーの交代がなされていったのか。もう一度聖書に立ち返って確認したいと思い、2024年度の道標聖句に民数記27章17節を掲げさせていただきました。ここでは、それまで四十年間民を率いてきたモーセからヨシュアにリーダーシップが移っていく場面です。神はどのようにして指導者交代を進めていったのか。そのときモーセはどうしたのか。ともに見てまいります。

1 ツインの荒野における二つの出来事

1) カナン偵察 (13章)

そこでまず取り上げたいのが、14節の「ツインの荒野」という場所です。というのは、このツインの荒野を巡っては四十年の時を隔てて二つの大きな事件が起きていて、その二つの事件が指導者交代と不思議なつながりがあるからです。まず最初の事件からとりあげます。

ときは、イスラエルの民がエジプトを脱出したすぐ後。そのときは荒野をさまようことはなく、まっすぐカナンの地に向かうのですが、いきなりそこへ入るのではなく、まず様子を探りましょうということで、斥候を出して偵察することにします。そこで各部族から一人ずつ計十二人が選ばれて偵察に向かい、四十日間かけて調べます。そうして戻って来て報告会が開かれた。まず最初に報告されたのはよいニュース。「あそこは乳と蜜の流れている非常に素晴らしいところだった。」それを聞いて人々は大喜び。ところがその次にあった報告はこうでした。「あそこにいる人たちは背の高く、それに比べれば自分たちはバッタのように小さく弱くて絶対に勝ち目がない。」これを聞いて人々は動揺し、「かしらを一人立ててエジプトに帰ろう」と言って騒ぎ始める。これを見て偵察隊のメンバーであったヨシュアとカレブの二人が前に出て、こう語るのです。「私たちが巡り歩いて偵察した地は、すばらしく、良い地だった。」「主が

私たちとともにおられるのだから、彼らを恐れてはならない。」ところが人々の怒りはおさまらず、かえって二人に石を投げて殺そうと言いだす始末。モーセがとりなしてその場はなんとかおさまりましたが、主を信じる事ができなかったということで、それ以来イスラエルの民は荒野をさまようことになった。それがツインの荒野で起きた一つ目の事件でした。

2) メリバの水 (20章)

二つ目の事件が起きたのは、最初の事件から四十年間荒野をさまよって再びツインの荒野に戻った時のことです。人々は今度は「水がない」と言ってまた騒ぎだす。それで主はモーセに「杖を取って岩に命じなさい。そうすれば岩から水が出る」とお語りになりました。モーセはそのときよほど頭にきていたのでしょうか。こう言うのです。「逆らう者たちよ。さあ、聞け。この岩から、われわれがあなたがたのために水を出さなければならぬのか。」そう叫んで、岩を杖で二度打った。そうすると岩から水が噴き出してきて、人々はそれを飲んで助かった。ところが主は、モーセのやりかたが悪かったと言って咎めるのです。それが14節です。「ツインの荒野で会衆が争ったとき、あなたがたがわたしの命令に逆らい、彼らの見ている前で、あの水のところで、わたしが聖であることを現さなかったからである。」これはツインの荒野のメリバテ・カデシュの水のことである。」

2 モーセ

1) カナンの地を見て死ぬ

その結果、モーセはどんな報いを受けることになったか。少し前後しますがそれが12, 13節です。「主はモーセに言われた。「このアバリム山に登り、わたしがイスラエルの子らに与えた地を見よ。それを見て、あなたもまた、あなたの兄弟アロンが加えられたのと同じように、自分の民に加えられる。」この山からカナンの地を遠くに見て、あなたはここで死ぬと宣告されてしまった。どう思いますか。

思い返せば四十年前です。モーセが荒野で一介の羊飼いとして暮らしていたとき、突然主に呼び出され、半分無理矢理というかたちでエジプトにいるイスラエルの民を救うために遣わされていきまし

た。ところがそこから苦勞の連続です。ことあるごとにイスラエルの民はうなじを硬くし、不平不満を言い、気に入らなければモーセを殺そうとさえする。そういう人たちのために彼は身を粉にして働いてきました。それなのに、岩から水を出すときにあなたのやったことは良くなかったと主から咎められ、挙げ句の果てに、あなたは約束の地に入ることができない、ここで死ぬと言われる。モーセはどう思ったのでしょうか。

2) 永遠のいのちを信じる

16, 17節でモーセはこう申し上げます。「すべての肉なるものの霊をつかさどる神、主よ。一人の人を会衆の上に定め、彼が、彼らに先立って出て行き、先立って入り、また彼らを導き出し、導き入れるようにしてください。主の会衆を、羊飼いのいない羊の群れのようにしないでください。」

このことばから、モーセが二つことを見ていたことがわかります。一つ目。申命記には、このとき百二十歳でしたが彼の目はかすまず、気力も衰えていなかったとあります。まだまだ自分は指導者としてやっていけるという自信はあったと思います。ところがあなたは約束の地には入れない、間もなく死ぬと告げられた。これから食事ですといわれてテーブルに座ったら、目の前からおいしいごちそうが取り去られるようなものです。普通なら文句を言いたくなる。ところがモーセは腹を立てた様子はない。なぜか。彼も永遠のいのちを信じていたからではないですか。地上で与えられる約束の地よりもはるかに勝る天の御国に入れられることを信じていたので、たとえ自分の仕事が途中で取り上げられるようにして終わっても腹が立たない。これがモーセが見ていた一つ目のこと。

3) 羊飼いのいない羊の群れのようにではなく

モーセが見ていたことの二つ目。彼が常に気にかけていたのは、自分のことではなく、主の会衆、羊たちのことでした。自分がいなくなった後、彼らが羊飼いのいない羊のようにしないでください。自分に代わる後任の指導者を与えてくださるように祈ります。そのとき彼は、「羊飼いのいない羊の群れ」と言っています。彼自信がもともと羊飼いを職業としていましたから、羊飼いがいないと羊がどうなるかよくわかっていました。羊はどこが危険でどこが安全かわからず、やみくもに進んでいく。そのうち弱い羊は群れからはぐれてひとりぼっち。そうなったらもう野の獣の餌食です。そうやって群れ全体がどんどん減っていき、やがて滅

んでく。羊飼いがいないということは、それほど大変なことだとモーセは知っていました。

その羊飼い、一般的にはリーダーと言われるわけですが、どのような団体、グループでもリーダー交代ということが普通にあります。方法はいろいろで、これまでのリーダーが次のリーダーを指名することもあります。モーセもしようと思えばそうできた。実を言えば、モーセは次のリーダーはヨシュアだと確信していた。四十年前、カナンの地には恐ろしい人たちがいると聞いて、人々がエジプトに帰ろうと騒いだとき、ヨシュアがいのちをかけ、人々を説得した様子をモーセは見ていた。それ以来、ヨシュアを自分のそばに置いてリーダーになる訓練をしてきたのです。しかしそれでも、次の指導者を決めるのは自分ではない。主が決めることである。これがモーセが見ていた二つ目のことです。主はモーセの祈りを聞かれ、ヨシュアを次のリーダーに選び、ここに書かれているとおりにイスラエルのリーダーの交代がスムーズになされていきます。

3 イエス・キリスト

1) 働き手を送ってくださるように祈りなさい

この「羊飼いのいない羊の群れ」というフレーズは、実はイエスも語っておりました。人々がイエスのうわさを聞いて、病氣や悪霊につかれている人を連れて行ったとき、それをご覧になったイエスはマタイの福音書9章36節から38節でこう言われるのです。「群衆を見て深くあわれまれました。彼らが羊飼いのいない羊の群れのように、弱り果てて倒れていたからである。そこでイエスは弟子たちに言われた。『収穫は多いが、働き手が少ない。だから、収穫の主、ご自分の収穫のために働き手を送ってくださるように祈りなさい。』」

この場合、働き手とは直接には献身者のことであり「羊飼い」のことでもあります。イエスが語られたとおりに、モーセは次の「羊飼い」が与えられるように、主に祈りました。たとえ心の中にヨシュアが最も適任であるとは考えはあったとしても、後任の羊飼いは主が与えたと信じ、主に祈り求めました。

ところで素朴な質問ですが、なぜ主は羊飼いを送ることができるのでしょうか。主はこう語っておられるからです。ヨハネの福音書10章1節。「わたしは良い牧者です。良い牧者は羊たちのためにいのちを捨てます。」

羊を救い守るためにいのちを捨ててくださいます。それほど大切な羊が教会に集められています。

そんな羊の群れが再びばらばら散り散りになって弱り果ててはならない。だから主は必ず羊飼いを送ってくださると信じます。

2) 教会

いま私たちは、主が与えようとしておられる後任の牧師がだれであるのかはまったくわかりません。しかしモーセのことから一つだけ分かることがある。次のリーダーはヨシュアであると知らされたとき、人々は驚いたか、意外な名前を聞いて戸惑ったか。そんなことはない。みな、心の中でヨシュアがふさわしいことがわかっていた。なのでヨシュアの名前を聞いたとき、全然違和感がない。

「やっぱりそうか」と思った。おそらくこの教会の次の牧会者の名前が明らかになるとき、もしほんとうに主が与えてくださった方であるなら、皆思うはずです。「やっぱりこの人だ。」

前回、御霊によって一致を保ちなさいという話をしました。まさに、御霊によって、ひとり一人の目が開かれ、この人こそ主が選んだ牧会者だと一致できる。そのような方が与えられるように、この一年間祈って歩んでまいりたいと願います。